審 査 結 果 の 要 旨

（１）研究の目的に意義や独創性があるか。

本研究は, フロー理論という心理学的な概念に着目して,それを一瞬で消え去ってしまう音を扱う音楽教育の現象面を分析するために応用し,実際のヴァイオリンの集団学習の学びの場面では一体どういったことが起きているのか,ということをミクロで分析しようと試みた研究である。

申請者は, アメリカにおいてプロのヴァイオリン奏者としての演奏経験を有しつつ, 日米両国において, 10 年間以上に亘り一貫して幼児･児童のヴァイオリンの集団学習の指導実践, 及び実践的研究に取組んで来たが, 特に子どもを対象とした弦楽器教育の領域では, 演奏の技術を習得することに偏重し, 音楽による人と人の関わり合いがないがしろにされている現状に危惧を抱いた。そのような教育への批判的な立場から, ヴァイオリンの集団学習の意義を, 従来型の弦楽器の一斉指導とは区別して, 全ての学習者が共有可能な, 音楽で他者と関わり合う喜びに着眼して見出し, そのことを起点として, 申請者自身が実践と研究の連関を図りつつ, 批判的･実践的に検証しながら新たなヴァイオリンの集団学習をデザインすることを, 具体的な研究の目的としている。

作音楽器である弦楽器は, 弦を押さえる指の位置や, 弦上に弓を乗せる微妙な位置や圧力, 弓を動かす速度を調整することで, 音を自在に変化させられるという特性を持っている。このことに着目すると, ヴァイオリンの学習者がより多彩な音の探求を経験するのみならず, ヴァイオリンを学ぶこと自体に, 既に多様な挑戦が内包されていることがわかる。このことが, ヴァイオリン学習者の学びのフローを喚起する要因になるのでは, との仮説に基づき本研究は進められた。

これらのことから本研究の目的には, 意義と独創性があると評価できる。

（２）研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本研究は, 社会心理学者チクセントミハイのフロー理論を, 幼児･児童のヴァイオリンの集団学習に応用した実践的研究である。日本の音楽教育分野では黎明期にあると言えるフロー研究を, 本研究では, 本邦初導入となるコロンビア大学のカストデロが創案した子どもの音楽活動の観察法を援用して, 幼児･児童のフローの仔細な観察を行い, それらをオーストラリアのクイーンズランド大学のバレットが提唱する音楽教育のナラティヴ研究の手法を用い, ナラティヴを構成し, そこから得られた知見をふまえつつ, 申請者自身が実践者として参与観察を行う事例研究, 及びアクションリサーチの研究手法を用いて研究を進めている。具体的には, 申請者自身が幼児･児童のヴァイオリン指導実践を担当するとともに, 実践の中でヴァイオリン演奏も行っており, 指導者, 演奏者, 研究者としての３つの視座の融合と, 研究と実践の連関が図られている。申請者の研究は, 既にアメリカや日本国内での口頭発表や論文発表などで高く評価されている。2013 年には, フィンランドのヘルシンキで開催された音楽教育のナラティヴ研究の国際学会で口頭発表を行うなど, 研究方法の国際的な議論や動向を十分にふまえた上で本論文の執筆にあたっており, 国際的で学術的な研究方法であると評価できる。

（３）研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

本研究では, 申請者が一貫して全ての事例に実践者として関わりながらデータの収集がおこ

なわれた。申請者が初学者として受講したフルートの集団学習の授業を通した予備的調査,そして本調査として,申請者が指導を担当した幼児･児童対象の複数のヴァイオリン学習の事例を検証した。事例は少人数ではあるが,2 歳,5 歳,小学生 1 年生,3 年生と発達段階を踏まえた縦断的な研究で,データの収集は,子ども一人一人が日常的にヴァイオリンと関わるプロセスを,指導者の教示が介在しない自然観察を含めて継続的に行われた。ビデオを用いた観察に加え,フィールドノートの記録や,適宜インタビューを交えながら,複合的なデータを用いてナラティヴの構成にあたっているのも特徴で,これらによって集められたデータの分析は,客観性を担保するため,各フィールドに研究協力者を得て複眼的に行われた。このようにデータの収集と分析も適切になされた。

（4）研究の考察と結論が妥当であり,学術的な水準に達しているか

本研究を通して得られたデータは,ビデオを用いた自然観察法から中学生によるアンケートまで様々で,また各データは充分に詳細であり,それぞれのデータにふさわしい方法で多角的な考察が行われた。その結果, ヴァイオリンの集団学習におけるフロー経験が,学習者の相互的な関わり合いの中で変容し喚起されていることが示された。最終的には,幼児と児童を対象としたヴァイオリンの集団学習の授業の実践モデルを開発し,さらにこれらの研究を応用して中学校のヴァイオリンの集団学習の授業を開発し,実践を通して省察した。そして,結論としてフロー理論に基づいたヴァイオリンの集団学習が,学習者一人一人が抱く,音楽を通して他者と関わりたいという渇望を保障することが明らかにされた。また,ヴァイオリンの集団学習の実践的研究を通して観察された学習者のフロー経験を分析することで,他者と共に学ぶことにより多様な学びの影響を受けるなど,ヴァイオリンの集団学習に固有の学習の意義が明らかにされた。このように,考察は詳細に行われ妥当な結論が得られ,また学術的にも水準に達していると評価できる。

（5）取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

本研究では,フローの仔細な観察を通して,人が音で関わり合うという,人間の根源的な関わり合いのプロセスについて検証そして考究し,音楽を学ぶこと,そして教えることの意義があらためて示されたと言える。また,ヴァイオリンの学習のみならず学校の音楽教育に対しても,たとえば,授業を見る視点,授業を作る視点や,他者の存在が非常に重要であるという視点,そして子どもに自由な時間を与え子どもが主体となる時間を充分に作るということの重要性など多くの示唆を与える研究で,今後の音楽教育にも寄与すると思われる。

以上の成果から,博士（教育学）論文として評価できる。